

祝

日本農業遺産認定 「雪の恵みを活かした稲作・養鯉システム」

「県の鑑賞魚」指定決定 J A 錦鯉市場特集



小千谷市や長岡市、両市の住民団体、J A、錦鯉関連団体などで構成する「長岡・小千谷『養鯉発祥の地』活性化推進協議会」が申請した「雪の恵みを活かした稲作・養鯉システム」が、日本農業遺産に認定されました。又、平成29年5月5日付けで錦鯉が「新潟県の鑑賞魚」に指定されることが決定しました。これを記念してJ A越後おぢや錦鯉市場の特集をお届けします。

▲威勢の良い掛け声の響き渡るJ A 錦鯉市場

春の風物詩

「錦鯉初セリ」

4月14日（金）、小千谷市岩間木地内のJ A越後おぢや錦鯉市場で、春の風物詩「錦鯉の初セリ」がおこなわれました。県内で唯一の錦鯉取引市場の同市場では、色とりどりの錦鯉が入れられた「舟」と呼ばれる青いケースが会場に搬入され、番台の軽快な掛け声のもと、次々とせり落とされていきました。当日は、228舟（約6,000尾）が出荷されました。多くのセリ参加者の他に、NHKや民放各社・新聞社が多数取材に訪れ、にぎわいました。

当J Aの谷口熊一組合長は「日本農業遺産認定、県の鑑賞魚にも指定され素晴らしい年になる」とあいさつしました。今年は11月24日までの毎週金曜日に市場を開き、

計32回を予定しています。



初セリ準備

「舟出し」作業

3月31日（金）、初セリに向けて市場の準備をおこないました。園芸特産課の職員10人が、錦鯉を入れる「舟」約600個を、錦鯉市場の2階から手作業で降ろしました。「舟出し」と呼ばれる、春の訪れを告げる恒例の作業です。

※一般的には「観賞魚」と表記しますが、錦鯉が美術的な価値があるという意味を含め、あえて「鑑賞」の文字を使用しています。

J A 錦鯉市場の歴史

J A の錦鯉市場が開設されたのは昭和41年の4月。以前から錦鯉の市場は県内に散在していましたが、東山地区では新潟県錦鯉養殖漁業組合が東山支所（現在のJ A 越後おぢや錦鯉センター）の前方で定期的に市場を開設していました。当時は、利用度も低く、経営も不安定であったことから、地元養鯉生産者からJ A による経営を強く要望されていました。また、養鯉生産者は越冬施設も無く、業者の買い叩き等により、思うような価格で販売することが困難でした。このような背景のなかで、J A 経営の錦鯉市場は全国でも前例がなく、理事会でも賛否があり、決定については困難を極めました。それらの経過を経て、地元受益者が特別出資をおこなうことを条件に市場開設の運びとなりました。

開設初年度、市場は4月から11月まで毎週土曜日に35回開かれました。この年の実績は、競売売上高で

3831万4300円、鯉売上高で120万2400円、総舟数1万684舟、平均舟数305舟、1回の平均売上高109万4000円、一舟

平均価格3500円でした。この結果、従来は価格が下がる秋口に集中していた出荷を、春先の価格の高い時期にできるように、J A では、



▶第1回錦鯉品評会当時の様子

年間を通じた計画出荷を呼び掛け指導しました。また当時は、地元の業者が落札し、県外

その他の業者へ流していました。その後、県外客が市場へ直接買い付けに来るようになり、市場も軌道に乗りました。市場開設記念として、第1回の錦鯉品評会が盛大に開かれました。

錦鯉ブーム最盛期

昭和44年頃には、好景気を反映して、錦鯉市場にも県内外から多数の錦鯉購入客が来場しました。小額な雑魚の注文も多く、俗に頭と尻尾がついていれば売れた時代だったと言われています。儲け話に惹かれたわけでもな

いが、土地は借りても池を作り、農業と関係のない人も飼育をおこないました。農協錦鯉市場も取扱高は上昇しました。反面、過密飼育による給餌量の増加から、魚病の発生も多く見られました。

現在の錦鯉市場

初年度に開かれた錦鯉品評会は現在も開催されており、昨年、50回の記念大会が開かれました。また、記念大会では、来場者から抽選で選ばれた5人の方へ錦鯉生産者から提供されたオーナー鯉が進呈されました。オーナー鯉は現在錦鯉の里で鑑賞することができます。「新潟県の鑑賞魚」になることが決定した錦鯉は、日本国内だけでなく、欧州や米国、中国、東南アジア、中東各国など多くの国に愛好家があり、「泳ぐ宝石」と呼ばれ人気を博しています。J A 越後おぢやの錦鯉市場は現在職員4人体制で業務をおこなっており、新潟県唯一の錦鯉市場として注目を集めています。

